第　６３号

平成２０年８月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

お盆を迎えて

間もなくお盆です。お盆やお彼岸にお墓参りをされると思いますが、お盆とお彼岸では同じお墓参りでもその意味に違いがあります。

交通安全週間とか、緑の週間などの活動強化の期間がありますが、お盆は「祈りの期間」であり、お彼岸は「学びの週間」と言えます。

※

お盆の始めは「迎える」、その終わりを「送る」と表現し、お彼岸の始めは「入る」、その終わりを「帰る」と表現します。

お盆の『迎える』は、「私は、ご先祖さまの御霊（みたま）を一年ぶりにお迎えして、懇（ねんご）ろに供養いたします。」、そして『送る』は、「私は、心残りですが、また来年会えることを楽しみに、そして約束しながら御霊をお送りいたします。」

また、お彼岸の『入る』は、「私は、貪り（むさぼり）、怒（いか）り、妬（ねた）みなどの煩悩（ぼんのう）に満ちた現実の世界である此岸から、こだわりのない理想の世界であり、覚りの世界である彼岸に目を向け、心を彼岸に入れます。」、そして『帰る』は、「私は、お彼岸の期間で心を浄化させました。彼岸の心を忘れないようにして現実の日常生活である此岸の世界に帰ります。」ということです。

「迎える」と「入る」、これは自分自身の行動として捉えます。ですから、「私はお盆を迎える」であり「私は彼岸に入る」なのであります。

※

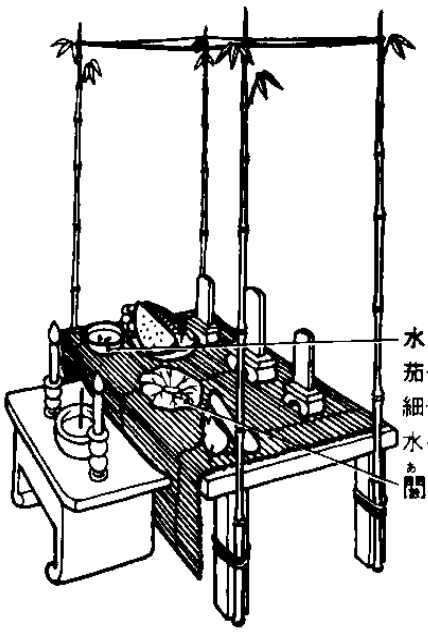
私たちは、お盆の供養でご先祖さまに対する感謝の気持ちを表し、その心を養うのがお彼岸なのです。

「祈りの期間」であるお盆には、祈りのエネルギーに包まれたとても穏やかな表情をされた大勢の方がお墓参りに訪れます。

自己主張ばかりが目立つ殺伐（さつばつ）とした現代ですが、「お陰様で」、「ありがとう」という報恩謝徳の心を、お盆を迎えるに当たり、もう一度取り戻したいものです。

南無大師遍照金剛　　合　掌

お盆は８月１３日～１６日までの４日間



精霊棚の飾り方の一例

達　者

「達者」は、健康なさまを意味する言葉としてよく使われる。また、芸達者と言う場合は、その芸の達人を意味する。

元は仏教語で、真理に到達した覚者を表す言葉である。学ぶべき事を学び終わり、真理に到達して心も身体も健康な者から現代の意味に転じたのであろう。

空海の言葉　シリーズ

常楽（じょうらく）の果（か）を期（ご）するは自利（じり）なり

●●●永遠の楽しみを望むならば、
自分の利益をはかれ

お釈迦さまは七年間、難行苦行の修行をされました。しかし、死ぬ寸前のところまで自分の体を痛めつけても、悟りが得られませんでした。

「なぜだ！　こんなに苦行をしても、どうして悟りが得られないんだ」このときのお釈迦さまは、「悟りの境地」という自分の利益を追い求めて、あせっているのです。

現代人は利益というと即「お金」と考えてしまいます。そんな即物的な利益ではなくて、お釈迦さまは「悟りを開いて仏さまの世界に入る」という、精神的な利益を求められたのです。「このまま苦行を続けていては死んでしまう。それでは悟りは得られない」そう思われ、考えの方向を変えられたお釈迦さまは、たまたま通りがかった村娘が差し出す食事をいただいて、健康を取り戻したあと、大木の根元に座って瞑想に入りました。

そして十二月八日の未明、忽然として悟りが開けたのです。「生きながらにして仏の世界に入る」　これを「即身成仏」といいます。弘法さんはそれを切望されて、長年研究に研究を重ねられました。仏の世界に入る。悟りの境地に達する、という利益。こんな大きな自分の利益はありません。